なごや文化情報

2017
5・6
May / June

No.374
NAGOYA
Cultural
Information

随想／窪田 健志（名古屋フィルハーモニー交響楽団）　視点／“芸どころ名古屋”で育つコラボ作品ー箏曲正絃社の活動からー
この人と／平野 茂平（エレクトリック・レディ・ランド代表取締役）
いとしのサブカル／梅村 紀之（アイドル教室プロデューサー）

公財団法人 名古屋市文化振興事業団

2017
5・6
May / June

Contents

名古屋市民文芸祭　受賞作品…… 2

随想　リズム感、一考。
窪田 健志（名古屋フィルハーモニー交響楽団）…… 3

視点　“芸どころ名古屋”で育つコラボ作品
ー箏曲正絃社の活動からー…… 4

この人と・・・
平野 茂平（エレクトリック・レディ・ランド代表取締役）…… 6

ピックアップ　アリアCD　クラシック音楽のソムリエ…… 10

いとしのサブカル　梅村 紀之
（アイドル教室プロデューサー・株式会社アイキョウ代表取締役）… 11

おしらせ…… 12

「なごや文化情報」編集委員
倉知外子（現代舞踊家）
はせひろいち（劇作家・演出家）
森本悟郎（表現研究・批評）
山本直子（編集・出版 有限会社ゆいぽおと代表）
米田真理（朝日大学経営学部教授）
渡邉 康（椙山女学園大学教育学部准教授）

表紙

作品
不条理を開示する形態―1408
（2014年／磁器／W60×D58×H98cm）

生きている自覚は他者に表現することで実現します。
しかし、それは合理的な表現だけでは成し得ません。
粘土の持つ可塑性と私の格闘は、私のこころの奥底に問いかけて、
内なる不条理を引きずり出します。

中島 晴美（なかしま　はるみ）

1950年　岐阜県恵那市に生まれる
1973年　大阪芸術大学デザイン科卒業

愛知教育大学元教授
多治見市陶磁器意匠研究所　所長
http://www.ne.jp/asahi/aaa/nakashima/

「2016年　名古屋市民文芸祭」
（第六七回名古屋短詩型文学祭）小・中学生の部
短歌の部　受賞作品より　※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆
愛知教育大学附属名古屋小学校2年　松坂 美佑
たんじょう日しょうたいじょうがうれしいな
どんなパーティするんだろうな

◆市会議長賞◆
名古屋市立白沢小学校トワイライトスクール2年　白鳥 瑛士
なつ休みかみなりなってびっくりだすごい大雨
みちが川だよ

◆市教育委員会賞◆
名古屋市立小坂小学校5年　服部 咲桜
夏休み計算問題解き終えてうでに写った
数字に笑う

◆市文化振興事業団賞◆
名古屋市立左京山中学校3年　加藤 縁美
夕闇に光の花が咲くころはただただみとれて
動けないんだ

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆
東海市立加木屋小学校5年　早川 天雅
ユーカリが風にゆられて楽しそう葉っぱが
飛ぶよ葉の飛行機だ

◆中日賞◆
椙山女学園大学附属小学校6年　中村 彩希
練習をがんばり続けまめ出来るまめはみんなの
がんばり印

随想

リズム感、一考。

くぼ　た　たけ　し
窪田健志（名古屋フィルハーモニー交響楽団）

1983年大阪府出身。長野県上田高校を経て、東京藝術大学卒業、同大学院修了。
現在、名古屋フィルハーモニー交響楽団に所属。
名古屋市立菊里高校音楽科、名古屋音楽大学、洗足学園音楽大学の各非常勤講師。

名古屋に来て暫くしてから、ウィーン少年合唱団を聴きに行く機会があった際、面白い場面に遭遇した。

「上を向いて歩こう」を彼らが歌った時のこと。お客さんたちは合いの手で手拍子を入れ始めたが、これがダウンビート(1,3拍)だったので、曲が炭坑節のようなノリに聞こえてしまい、奇妙に感じた。SUKIYAKIとして、ビルボード1位になった曲には、本来アップビート(2,4拍)の手拍子(よりは指でのスナップ?)が似合うはずだけど…。

僕たち日本人は本来、農耕民族で、田畑で重い鍬を振り降ろして、耕して生活をしていた。人に会えばお辞儀をする。床に胡座をかいて座り、文章は上から下に縦書きで、仮名文字も、大部分は上から下へ流れる。能では足を擦り歩き、国技である相撲ではシコに合わせて「よいしょー」と声が飛ぶ。演歌や民謡の合いの手は「揉み手」とも呼ばれる、閉じる方向(→←)にある手拍子である。

代わって、西洋人。騎馬(遊牧)民族で、馬に揺られパッカパッカ(Swing)弓を引いて、放す(その後は銃)。人に会えば一歩踏み出し握手、椅子に座らず「腰掛け」る感覚、文章は横書き、ローマ字(筆記体)は、次に繋がるように右上に向かって終わる…日本語で「弱起」と表記する「アウフタクト」は本来はup beatと同義語。草履や下駄には、かかとを引っかける場所がない。今や日本人も普通に行う賞賛する為の拍手、方向性は真逆のはず。

動画サイトに挙がっていた映像。Hip hopを聴きながら、身体を楽しそうに動かしている幼児。腰を中心に下半身が柔軟に動く。また、ジャンベ(アフリカの太鼓)をパンチの効いたシンコペーションで奏する小さい子もいた。「習い事」ではなく、まさに身体から湧き出るリズムだ。

こう述べていると、「リズム(の)感(じ方)」は、遙か祖先からの遺伝子に組み込まれているような気までしてくる。しかし西洋音楽の世界において不幸なことばかりかというと、環境や本人の努力(と運)次第で、本場で活躍されている人もいる。カールスルーエ音楽大学(ドイツ)の教授、現代音楽の大家となった中村功先生は、東京藝術大学時代にサンバ部を「創設」したと!昨年も名古屋に滞在していた面白いオジサンだ。

西洋音楽と対峙する時、どういう音がこの場面に相応しいか?どういうリズム感(ノリ)で僕は演奏したいのか?作曲家は何を感じて、そこにその音を書いたのか?

そんな事を常日頃から考え、演奏している僕の職場は名古屋フィルハーモニー交響楽団。入団して早七年目、昨年は創立50周年を迎えた。名古屋の市民の皆様あってのことと感謝の気持ちと共に、今日もホールでお待ちしてます。

Report 視点

“芸どころ名古屋”で育つコラボ作品 ―箏曲正絃社の活動から―

近年、さまざまなジャンルで聞かれる「コラボレーション(collaboration)」「コラボ」ということば。だが異なる分野による「共同制作」「共演」には、相当な困難さのあることが想像できる。単にばらばらなものが寄り集まっただけの作品になるかもしれないし、逆に、統一感を求めるあまりに個々の性格が抑えられた、妥協の産物になってしまうかもしれない。

ところが、近年コラボ作品を次々と成功させているとの評判が高いのが、箏曲の正絃社である。邦楽には“しきたり”や“しがらみ”が多そうで、コラボは難しそうなのに、なぜうまくいくのだろうか。正絃社の二代家元である野村祐子さんにお話をうかがった。(まとめ：米田真理)

2016年のめざましい活動

箏という楽器は、単独での演奏や弾き歌いに用いられるほか、もっぱら三絃(三味線)や胡弓とともに「三曲」として演奏されてきた(明治以降は三絃と尺八)。

ところが、近年の正絃社は、実にさまざまなジャンルと交流し、好評を博している。昨年2016年下半期だけでも、三つの公演が大きな話題を呼んだ。

まず10月2日には、「あいちトリエンナーレ2016」の舞台芸術公募プログラムであった「正絃社合奏団30周年記念コンサート～華舞歳々～」にて、ジャズダンスの三代舞踊団と共演。

「正絃社合奏団30周年記念コンサート～華舞歳々～」 2016年10月2日

「モグラの婿取り」を演じた
井上松次郎さんと
2016年11月12日

続いて11月12日には、滋賀県文化振興事業団による芝居小屋長栄座公演「祈願～慈愛の歌～歓喜～喜びの唄～」の中で、新作の狂言風邦楽ミュージカル「モグラの婿取り」が披露され、和泉流狂言方の井上松次郎さんをはじめ、コーラスや日本舞踊と共演。

さらに12月10日、名古屋市芸術創造センター、セントラル愛知交響楽団、愛知芸術文化協会との共催による「日本人のDNA·椿説曾根崎心中夢幻譚」公演では、オーケストラや日本舞踊、琵琶、三味線、端唄、能との共演を果たした。

コラボレーションから得られるもの

祐子さんは、これらの公演を「あらためて勉強になることばかりだったし、本当に楽しかった」と振り返る。

例えば芸創センターの公演では西洋音楽の五線譜が“共通語”となったので、練習に先立ち箏の譜への書き換えが必要だった。演奏の際に、オーケストラとともにピットに入り、作曲·演出の山本雅士さんによる指揮に合わせて演奏したのも、多くのお弟子さんにとって新鮮な体験だった。このとき、祐子さんは、オーケストラの他のパートと同じように、箏の調絃(チューニング)を演奏者各自で行ってもらうことにした。これは邦楽の世界では珍しく、ふつうは師匠が弟子の分も行うものだという。

「椿説曾根崎心中夢幻譚」カーテンコール、ピットの中に箏が
2016年12月10日

器楽と合わせる声楽についても発見があった。「椿説曾根崎心中夢幻譚」は和製オペラとして作られたが、通常のオペラとは異なり、今回は端唄が声の部分を担った。邦楽といっても、いつもの箏曲の発声法とはまるで違う。だが、うまく合わせようという努力を通して、箏に合う声とはどのようなものかや、いつもの地唄や箏曲とは何かといった、根本的な問いに向き合うきっかけになった。

そもそも箏曲は江戸時代以降、三絃や胡弓、あるいは尺八とともに、互いに影響しながら音楽的表現を豊かにしてきた歴史がある。そういった意味では、箏は昔も今も、他の楽器や音曲と出会いながら発展し続ける楽器だといえる。そうした箏の可能性を拡げるうえで、オーケストラとの合奏は大きな意味を持つ。

さらに、このような音楽的な面に加え、セントラル愛知交響

楽団との共演には、芸術の普及活動についても刺激を受けることがあった。それは、同楽団の活動に込められた“市民のための音楽を”という姿勢を実感したことだった。この姿勢こそが、洋楽・邦楽の別を問わず、市民に芸術が根ざす土地柄“芸どころ名古屋”の気風なのだと納得したという。

コラボレーションのルーツ

こうしたコラボ企画の成功の背景としては、正絃社の創始者で先代家元である、父・野村正峰さん（1927～2011）の影響が大きい。正峰さんは幼少期から母である野村豊子さん（当道音楽会理事・名古屋支部長）の指導を受けていたが、陸軍士官学校に進み、満州で終戦を迎えた。内地への引き揚げ途上では、さまざまな悲惨な光景を目撃したという。

ところが終戦からまだ間もないある日、正峰さんと豊子さんのもとへ、箏を習いたいという親子が訪ねてきた。そのとき正峰さんは、堂々と音楽を楽しめるような世の中になったことを痛感した。そうした時代に応えなければとの使命感から、正峰さんは、子どもや若い人にも受け入れられやすい箏曲を作るようになったのだ。

その際には、学校教育を通して普及してきた西洋音楽への対応が試みられていた。祐子さんの子ども時代の思い出の中には、正峰さんが足踏み式オルガンの鍵盤に箏や尺八の音階「ロ ツ レ チ ハ･･･」を記した紙を貼り、いろいろな曲を弾いていた姿がある。120曲にも及ぶ正峰さん作曲の作品には、洋楽と邦楽が共鳴しながら発展していこうとの思いが込められている。

コラボレーションが成り立つ土壌

1965年に「野村箏曲教室」を発展させる形で正峰さんが箏曲「正絃社」を立ち上げて以来、同社中では合奏形態での演奏が重視されている。

ただし、集団で演奏することは、決して“個”が埋没するわけではない。なぜこのように演奏するのかを考え、自身の表現として演奏しなければ音楽にならないからだという。この点も、先述の調絃と同様に、オーケストラと共通する要素だといえる。

2015 正絃社創立50周年記念「春の公演」 2015年4月18・19日

正峰さんが定めた「正絃社師匠十訓」の中には、「師弟の礼を正すべし　礼なきところ　正しき芸は伝わらず」（第四条）、「先輩後輩の序を重んずべし　秩序なきところ　人の和は生まれず」（第五条）といった、伝統的な日本の芸能で重視される考えが示されている。だが、祐子さんは、師匠や先輩への尊敬も大事だけれども、個々が演奏することへの自覚も同じくらい大事だと語る。家元自身が社中を、演奏家の集団と位置づけている点に、正絃社の大きな強みがある。

また、演奏の場についても、音の響き合いを特長とする正峰さんや祐子さんの作品は、コンサートホールに向いているという。こうした土壌があってこそ、オーケストラとのコラボレーションをなし得たのだろう。つまり、コラボすること自体に無理のない点が、正絃社の成功の秘訣ではないだろうか。

コラボレーションのゆくえ

コラボに無理がないということは、作品の再上演や再構成がある点からもうかがわれる。例えば、10月2日の正絃社合奏団30周年記念コンサートで行われたジャズダンスとのコラボは、すでに2000年、三代舞踊団のヨーロッパツアーで試みられていた。このときはプログラムの中に正峰さん作曲の「鯱の城」を用いるという形だったが、今回はジャズの名曲に箏を合わせるという形で発展を遂げている。

また、和製オペラの製作についても、「椿説曾根崎心中夢幻譚」のメンバーの中で、次はシェイクスピアを、との声が挙がっているという。

野村祐子箏・三絃リサイタル−和洋の融合−にて
夫で尺八奏者の野村峰山さんとともに、弦楽四重奏との合奏
2009年11月7日

祐子さんにとってコラボレーションは、芸を極めた者どうしに通じるものを肌で感じられる貴重な機会となっているようだ。三曲以外の楽器と合奏することで、箏という楽器の特長を再発見できる。また、日本舞踊やジャズダンスといった舞踊、あるいは能や狂言といったセリフをもつ演劇との共演によって、音楽に物語性を加えることができる。作品を通して、箏曲の無限の可能性が、湧き上がるように生まれるのだ。

作り手にとって挑戦の場であるコラボ企画は、観客にとっても、ワクワクする経験になる。ただ、何事も“一期一会”とはいうものの、公演終了とともに跡形もなくなってしまうのは、やはり寂しい。一過性のイベントで終わることなく、将来も残る名作を生み育てようとする正絃社のコラボ作品に、今後いっそう注目していきたい。

この人と…

エレクトリック・レディ・ランド代表取締役

平野 茂平（ひらの もへい）さん

ライブハウス歴40年。まさに[ロックな]生き様。

東海地区はもちろん、全国のミュージシャンから一目置かれる老舗ライブハウス。「大須のELL」ことエレクトリック・レディ・ランドは、今年12月で40周年を迎える。その代表取締役である平野茂平さんは、時代の流れとパワフルに戦い、名古屋のロックの灯を守ってきた。辛口が売り物の支配人は、数えきれないバンドを世に出し、楽器を抱えた若者から今も「シゲさん」の愛称で親しまれている。オープン時から新生ELLの現在まで、波乱万丈な半生を取材した。

（聞き手：はせ ひろいち）

工作好きが高じ無線機やギターを自作

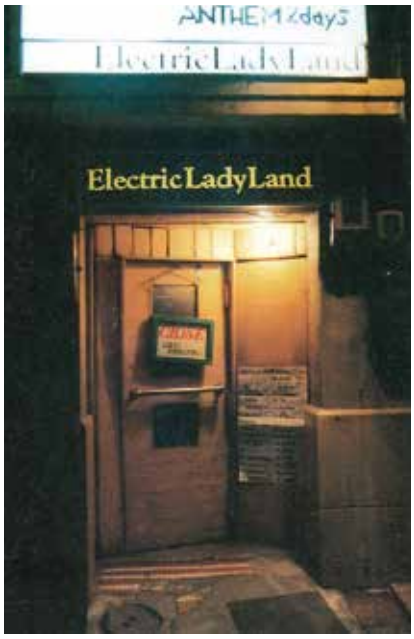
平野さんが生まれたのは1953年、愛知県西端の立田村（今の愛西市）。田舎暮らしを持て余すようにワンパクに育った平野さんだが、成績の方はそこそこ優秀で周囲の期待に素直に応え、後に名古屋の某進学高校に進む。「細かいことは覚えちゃないけど、小学生の頃から実験好きだった。雑誌『子供の科学』の付録の実験セットに夢中になってた」と平野さん。この［実験］という言葉は後の人生の伏線でもある。

そして中学時代は当時ブームだったアマチュア無線に傾倒し、送受信機も自作。FENやラジオから流れる海外の音楽に刺激を受けた。

当時はエレキギターを持っているだけで「不良」と呼ばれた時代、楽器店の存在も知らなかった。友人から譲られたアコースティックギターを自分でエレキに改造した。そしてある日、ラジオから流れたバニラ・ファッジの「キープ・ミー・ハンギング・オン」に衝撃を受ける。「あの歪んだギターの音が、いわゆるロックの洗礼だった気がする。当時の主流はグループサウンズ的なクリアな音だったから」と平野さん。実験心に火がついた。

バイトとバンド、少数派を貫いた高校時代

大学進学率95%という名古屋の高校に通いだし、都会のカルチャーショックと同時に、周囲の安定思考に違和感を覚える。「大げさに言えば、定年後を取るか『今』を取るかって感じかな。もともとヘソ曲がりだったけど、皆が既に持っているモノに関心がなかった。同じものはいらないだろ、って」と平野さん。バイトで買ったレコードプレーヤーでお気に入りの楽曲を溝が擦り切れるまで聞きまくった。輸入レコードは当時高価で、何枚も買え



今はなき「旧ELL」のエントランス

ないからロック喫茶にいりびたり。「どこかに商業的な音楽を選ばない気質」があり「少数派の中の少数派」だった仲間と高校でバンドを組む。学校行事やフェスティバルで演奏し、AMラジオの番組にも出演した。

「漠然と『大勢が好きではないモノ』がこの世に存在していてもいいんじゃないか?って思っていた。それを自分なりに検証したかった」と平野さん。高校はドロップアウト寸前で何とか卒業し、親や親類の手前、専門学校に進学。違和感や疑問符は一層くっきりとし、3カ月ほどで辞めた。

経営難の地下ライブハウスを引き継ぐ

18歳の時、初めてライブハウスで演奏したのは今池の「ユッカ」。セッションに来ないかとの誘いに単身乗り込み、必死に弾きまくって認められ、バンドの活動拠点になった。肉体労働で資金を作り、バンドの巡業や来日する海外アーティストのライブにつぎ込んだ。遠方でも一人バイクにまたがった。当時流行のヒッピー文化にのめり込む友人も多くいたが、平野さんはある種のシニカルな距離感を保ち、のめり込みはしなかった。通いのロック喫茶で学生運動の集会があり、思想的に否定はしなかったが、心酔することはなかった。

「自分がアウトサイドだという自覚は今も変わらないが、結局は今の世界、生活の中で生きざるを得ない。そんな感覚があって、当時の過激な思想とは折り合いがつかなかった」と平野さん。

そして1970年代中頃、音質的な問題で、バンド演奏の拠点を今池の「ユッカ」から、大須の「コマンド」という「喫茶店に毛の生えたような怪しいライブハウス」に移した。コマンドのオーナー自らが廃屋だった地下室を改造した空間で、我が国のロックの黎明期を支えた「センチメンタル・シティ・ロマンス」や「めんたんぴん」も演奏していた。平野さんのバンド出演を快諾し、開店時以外は練習にも使わせてくれたオーナーは2年後に夜逃げ。途方に暮れた平野さんはビルの大家にダメ元で店の譲渡を持ちかける。

「正直ライブハウスを経営したかったわけじゃない。儲けたいとか有名になりたいって欲もなかった。店は演奏の場であると同時に、僕にとって『音楽とヒトの関係性』を探る貴重な実験場。今が勝負時だって直感した」とは平野さんの弁。大家は「夜逃げした前オーナーがため込んだ家賃の肩代わり」を条件に承諾し、平野さんは念願の「地下実験室」を手に入れた。

かくして1977年12月、「エレクトリック・レディ・ランド」が誕生する。店の名は尊敬するジミ・ヘンドリックスが、自分の金で自分の音作りのためにNYに作ったスタジオ「エレクトリック・レディ・スタジオ」にちなんだ。平野茂平青年、若干24歳の冬だった。

入院の保険料が入り「レーベルをやろう!」

アーティスト平野の演奏風景
やはりサングラスは外せない

オープン当初、ライブは土日だけ、昼間は日雇いの肉体労働のため店は開けなかった。つまり家賃を平野さん自らのバイト代でまかなっていたわけだ。ライブも最初は自身のバンドに加え、知り合いを中心に出てもらっていたが、半年後には少しずつ出演バンドが増え始め、金曜にもライブを始めた。そのころには従業員を雇い、昼間はロック喫茶として営業を始めた。今でこそ大須はサブカルチャーの聖地的な市民権を得ているが、当時は大須観音の市に爺さん婆さんが集まってくるような街だった。住民や商店街とのもめ事も日常茶飯事だったと言う。

「ライブハウスを始めて、少なからず驚いたのは、この箱を使うバンドのほとんどが実はメジャー志向だと知った時。僕はELLを実験室、良くてカウンターカルチャーだと思ってやってたから、そのギャップにはびっくりした。売れてもつまんないのにな、なんて思ってたね」と平野さん。かといって音や器材へのこだわりは強く「東京や大阪に負けないよう」「出演バンドが胸を張って演奏できるよう」少しでも利益が出れば設備投資に割いていた。

慢性的な資金不足、昼間に肉体労働、夜は店とバンド練習の日々の中、不眠不休の激務が重なり、オープンから1年ほどしたある日、平野さんは自宅玄関で意識を失くし、病院に担ぎこまれる。1週間の昏睡状態の末、4カ月の入院。その間、仲間が何とか力を合わせてライブハウスを運営してくれた。そのありがたさを痛感しつつ、入院中のベッドの上で、平野さんは次の［実験］を構想する。それこそが、入院により保険金として支払われた100万円を使っての「次の一手」、自社レーベルを作る、という発想だった。

「この頃から、名古屋の音楽シーンを変えていきたいという思いが生まれ、それは今も変わらない」と平野さん。「やる側も『売れたい』という割に、名古屋スタンダードで満足する気質があって、高校野球で言うなら県大会止まり。それを何とかしたかった」と語る。

著書「ライブハウスの作り方」について

さて少し時系列から脱線しよう。と言うか、このままELL40年の歴史を紹介し続ければ、許された文字数をゆうに何倍も超えてしまう。そこで紹介したいのが、平野さんの著書「ライブハウスの作り方」（出版社:DAYS、税抜2,000円）だ。「ELL30周年アニバーサリー」と副題にもあるように、2008年に出版され、ここで紹介する内容も含め、平野さんの半生が自身の言葉で綴られた、まさに本音の一冊。マニアや関係者の間では幻の名著と噂されているが、幸い図書館やネットなどでも扱われている。ここでは紹介しきれない、ELL御用達の有名無名なアーティストたちの貴重なエピソードや、運営上の数々のトラブル、時代の流れにいかにELLが立ち向かい、時に敗れ、どう変遷していったのか、が嘘のない平易な文章で語られている。

開店当初、壊れたクーラーを買い替えるためバンドが結束した話や、19年続いたFM三重での独自番組の奮闘記、アマチュアバンドのスキルアップにも一役買った地獄のレコーディング合宿の話、平野さんがレギュラーゲストとしてプレイ参加していた非日常覆面バンド「なぞなぞ商会」の話、すっかり有名になった「PERSONZ（パーソンズ）」が平野さんとの昔の約束を果たすためシークレットライブをする話などなど、実際に大須の一角で行われた断片が凝縮した、カウンターカルチャーの貴重な資料でもある。

そして何より象徴的なのが、分厚い単行本の半分以上を割いてある、1977年から2007年までの、全バンドの出演スケジュール。憂歌団、爆風スランプ、電気グルーブなどのメジャーバンドと、名も知らぬ、おそらく今は存在してないバンド名までが、同じ小さな文字でぎっしりと羅列されている。口は出すが差別はしない。口は悪いが売れる売れないでレッテルは張らない。そんな平野さんの真意を感じる構成だ。一見ハウツーものにも誤解されそうな「ライブハウスの作り方」というタイトルは、逆に「そんな便利なノウハウはないんだよ」という、平野さん一流の遊び心とアイロニーではないだろうか。

平野さんが常連ゲストとして出演していた「なぞなぞ商会」、どれが平野さんかも謎なのだ

空前の「バンドブーム」の功罪

閑話休題。先述のELLレーベルは1993年までにジャンルを超えた38タイトルをリリース。オープン5年後には大改築を試み、よりライブハウスらしくなった。そして80年代中頃からバンドブームの大波がやってきた。「とにかく客が集まった。『SOLD OUT』なんて言葉も看板も、初めてだった」と平野さん。店の金回りは良くなり、仕事は増え、複雑な思いで平野さんは長年の肉体労働を卒業した。名古屋の箱自体が飽和状態だった。認めたくないバンド、ろくにチューニングも出来ないバンドも、受け入れざるを得ない状況。合言葉は「やりたきゃやれ」だった。

10周年アニバーサリーライブの1コマ、ANTHEM MADさんと

そんなELLの経営的絶頂期で多忙な中、ブームの一過性を見抜いていた平野さんは、次なる大きな実験のコマを進めていた。それこそが1987年2月に行われた10周年記念アニバーサリーライブ。会場はELLでなく、キャパ1000人のフレックスホール（現ダイアモンドホール）。ココを丸1カ月借り切って、ELLにしてしまう実験だ。

煙草やビールを落としてもいいように床の絨毯は全部張り替えた。出演バンドとの交渉を1年前から始め、結果、憂歌団、シーナ&ザ・ロケッツ、筋肉少女帯、ブルーハーツなどそうそうたる面々が集結。むろん当時は無名なバンドもごちゃ混ぜにした。「断られたバンドからは現実を学び、『面白そうだから』と快諾してくれるバンドから励みをもらった」と平野さん。そしてこの時の経験が、さらに13年後の［大実験］へと結びついていく。それが新生ELLへの移転事業だった。

「バンドブーム以前は、アーティストと小屋がもっとダイレクトに関係してた。お互いの顔が見えていたね。口の上手いプロデューサーやイベンターはライブハウスには顔を出さなかった」と平野さん。実際ブームの最盛期には、大きな資

本の、綺麗で設備の整ったライブハウスが市内にも次々オープンしていった。自分の箱で育った有能なバンドを、手放さない経営者も多くいたが、ELLではそういう縛りを一切しなかった。やがてブームが去り、多くのライブハウスが潰れていく「冬の時代」の中で、平野さんは既に新生ELLの移転先を探して、名古屋の街を毎夜歩きまわっていた。

自社ビルの2つの箱、さらにもう1箱

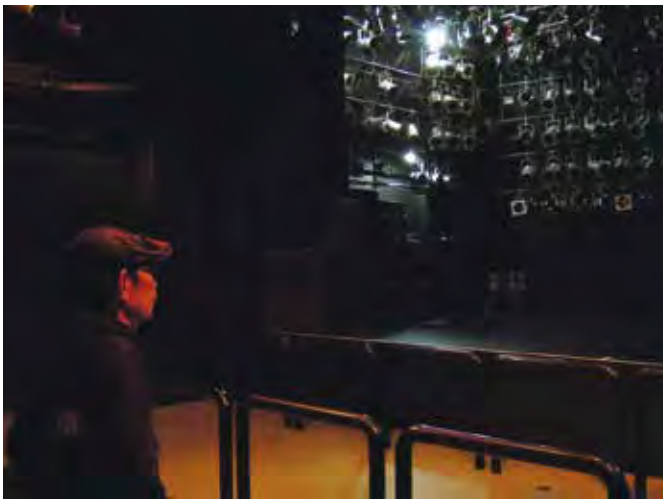
ELLが現在の場所に移転オープンしたのは2000年の9月20日。前日のレセプションも含めれば、3日前まで旧ELLで最後のバンドが演奏していた。理想とするテナントは見つからず、それでも大須から離れるのは避け、結局ウン億円の借金をして土地を買いビルを建てた。「ライブハウス専門の建築家なんていないからさ」と、自分で図面を引き、建築中は毎日、店が終わった深夜にチェックした。最新式のPA、豊富な照明はもちろん、興奮した客の

現在のELLのシックなエントランス

コンパクトかつ機能的なカウンター

酸素量、休憩中のトイレへの動線、全員が床で飛び跳ねても大丈夫な構造、平野さんにしか発想できないアイデアが詰まっている。キャパは600、トイレは13個作った。「ミキサーだけで数百万円。とにかく『良心的な音』が出せるために、たんまり金をつぎ込んだ。なにせ構想17年の代物だから」と平野さん。

そして同年9月にはビルの3階にキャパ300の「ell.FITS　ALL」がオープン。同じビルに2つのライブハウスを持つ構想は、完成するまで周囲の者にも隠していたという。ちなみにフィッツ・オールという名は、フランク・ザッパのアルバムタイトルから頂戴した。そして、2007年12月、


無数のライトに囲まれたELLのステージと平野さん

ELLに並ぶビルの中に3つ目のライブハウス「ell.SIZE」をオープンする。キャパ150、名前からも判るように、旧ELLと同じサイズの箱だ。先述の著書が発刊された、30周年の年だった。

そして、この新築移転のプランには、もう一つのこだわりが隠されていた。それは「平野色を抜く」ことだった。「音楽業界を取り巻く大手資本。レコード会社、放送局やイベンターも『ボーダーレス』になってる。実験音楽が出来ない環境に僕の色はいらないし、そもそもライブハウスは受け継ぐものじゃない。『ELL=平野』でなければ、僕じゃなくても誰かが次に繋いでいける。そんなシステムにしたかった」。実務をこなすスタッフたちに囲まれ、3つのステージが同時に見渡せるモニター完備の事務所で、平野さんは静かに語る。

新生ELL完成で実験は終わったのか?

一見、一線から身を引いたような平野さんの佇まい。だが「最高の箱」を作り上げ、次の時代を静かに見つめているようにも映る。ある意味、カウンターカルチャーを貫いた余裕の姿にも。ちなみに今年12月に迎える40周年に関しては「何かやるかも、何もやらないかも」と話す平野さん。どうにも目が離せない。

趣味の長距離ドライブの間もオーディオは一切聞かないという。「リバーブとかスネアドラムの音質とか気になっちゃてね」と平野さん。グレーの領域がないデジタル音源にも関心がなく、SNSからも距離をとる。「ここまでモノや情報が氾濫してくると、何もないのと同じでしょ。実は40年前のELL立ち上げの頃に戻ってる。どこにでもある、はどこにもないのと同じ。リバプールやNYから生まれたロックという言葉。まがりなりにもコレを使うなら、通用しないレベルのものが流通し、流行ってる。ロックはその辺に落ちてるモノじゃないはずなんだけどね」と平野さん。サングラスの奥、決して素顔をさらさないシゲさんの瞳が、また静かに笑った気がした。

ピックアップ

アリアCD クラシック音楽のソムリエ

ネット上で展開するクラシック音楽CD専門店「アリアCD」。http://www.aria-cd.com/

店主の松本大輔氏は大手レコード販売店の複数の店長を経て独立した。手書きのポップは内容の豊かさで評判を呼び、クラシックCDの売り上げを伸ばした。2012年には春日井市に事務所を持ち独立、舞い込むメールでの注文に目を通して発送する。大きな棚には発送待ちのCDが並ぶ。アクセスのある顧客は千人を超えるほどで、二人の事務員とともにフル回転の毎日である。

一般的なクラシックレーベルも扱うが、2013年からはLP、SP音源をCD—Rで復刻する「アリア・レーベル」を立ち上げて人気を得ている。この3月の時点で78枚目のリリースとなった。クレンペラー、クナッパーツブシュ、フルトベングラーなど往年のクラシックファン垂涎の名演奏をCDに作り変えている。良い状態で聴けるように細心の注意を払い復刻する高い技術により、半世紀以上前の演奏を鮮明に聴くことができるのだ。

CDを愛好するクラシックファンは99%男性とのこと。ほとんどがクラシック鑑賞のベテランで、「アリアCD」にさらに奥の深いクラシック情報を求めているという。

その一方で松本氏はクラシック音楽の愛好家を拡める活動も積極的に行う。その一つがレクチャーコンサートである。栄の宗次ホールにおける「大人の音楽学校」は実演奏とともに作曲家の人生の遍歴に触れて、その音楽の成り立ちの背景とともにより深い体験として音楽を鑑賞するという試みである。「ブラームスはお好き?」「フォーレとは何者か!?」「ベートーヴェンの青春時代」「青年モーツァルト、愛と絶望の日々」と続き、この3月11日には「スメタナ」がスメタナ作曲の『ピアノ三重奏曲ト短調』とともに語られた。

松本氏の時には感涙とともに語られる熱を帯びた語りは、作曲家とその作品への想いの深さが強く伝わるもので、聴き手はその迫力に否応なく引き込まれる。そして作品に込められた作曲家の想いも感じることができる。

CD販売とレクチャーでの現在的なクラシック音楽の伝道師である松本氏の活動は、クラシック音楽界の注目すべき動きであろう。

（W）

アリアCD店主の松本大輔氏

いとしのサブカル

アイドル教室の誕生

アイドル教室プロデューサー·株式会社アイキョウ代表取締役

梅村 紀之（うめむら のりゆき）

寿司処 五一の三代目店主兼名古屋のご当地アイドル「アイドル教室」のプロデューサー。作詞作曲も自身で行い、妹ユニットのプロデュースも手がけるなど精力的な活動を続けている。

私は「サブカルチャー」というような言葉の次のものになるようなムーブメントを起こしたいと思っています。

私はもともと音楽が好きで、ギターや歌を学んでいました。しかし、私の家は生まれた時から寿司屋を経営しており、父の強制的な勧めで家業である料理を学ぶための修行に出されました。自分が本当にやりたいこととは違うこと、そんな日々に嫌気がさし、勝手に修行を辞めて、「音楽で飯を食うぞ!」という決意を胸に1人で上京しました。

東京に上京したての頃は生きることに必死で、負けたくないという気持ちだけでやっていました。あの頃お世話になっていた下宿先で、おばちゃんがくれたアイスの味は今でも忘れません。

日々音楽を学び、曲を作り、ライブをすることだけは怠らず行っていました。ライブの日は打ち上げなどには参加せず、必ずその日の反省をしていました。オーディションもたくさん受けました。が、しかし芸事というのは厳しい世界で、なかなか芽の出ない日々が続きました。

ある日、電話が鳴りました。それは何年間も疎遠になっていた母からでした。「お父さんがもう危ないの…。」

修行を途中で投げ出してしまったことを、何も言わなかったけれど認めてくれていた父。名古屋への帰路、色々な想いが移り変わる景色とともに流れていきました。

駆けつけた頃には時すでに遅く、何も言えないまま永遠の別れとなりました。

父の死去により、長男である自分が家業を継がなくてはならなくなり、名古屋に戻ることにしました。突然経営する側に回り、それはもう慣れないことの連続です。

しかし、父からなかば無理矢理に教え込まれた料理のおかげで、体が覚えていることも多く、助かることもありました。将来のことを思い教えてくれていたのだなと、その時初めて父からの深い愛に気付きました。

家業を継いだ後もやっぱり音楽の道を諦めきれず、仕事の合間を縫って路上ライブをやるようになり、自分で作った歌を他の誰かに表現してもらいたい気持ちも芽生えてきました。そんな思いの中、誕生したのが「アイドル教室」です。まだアイドルチームが少ない名古屋では、これからブームが来ると思い、すぐさまメンバーを募集し、レッスンを開始しました。そして寿司屋の店舗の4階を改装し、現在では立派なライブスペースとして、しっかりとした公演をお届けできる体制を整えています。

普段は寿司屋でアルバイトをし、週末はアイドル活動を行う、通称「寿司ドル」という、歌って·握れる異色のアイドルユニットは、はじめは周りから変な目で見られることも多かったのですが、話題性だけでなく厳しいトレーニングを重ねてきた結果、活動も8年目を迎えました。徐々にメディアへの露出も増え、妹ユニットもできるなどの活躍を見せ、ZeppNAGOYAでワンマンライブを行えるまでに成長しました。

これも一緒に頑張ってくれているメンバー、応援してくださるファンの方、支えてくれている周りの方々のおかげです。

まだまだ夢の途中なので、「ただのネタでは終わらせない!」を合言葉に、これからも初心と感謝の気持ちを忘れずに日々精進していきたいと思います。

1966カルテット ～ビートルズ・クラシックス・コンサート vol.2～

前回、チケットSOLD OUTで大好評のうちに
幕を閉じた1966カルテットが、2年ぶりに
緑文化小劇場に凱旋!!
ロックスピリッツ溢れるパフォーマンスは必見！

林はるか、花井悠希、松浦梨紗、江頭美保

曲目

- 抱きしめたい
- ヘイ・ジュード
- レット・イット・ビー 他

※曲目は変更になる場合がございます。あらかじめご了承ください。

日時 2017年7月14日(金) 19:00

会場 緑文化小劇場

料金【全指定席】

一般	友の会	新規入会キャンペーン＜友の会会員権付＞
3,800円	2,800円	3,500円 通常：年会費3,000円＋会員価格2,800円 今回：年会費0円＋新規価格3,500円

※キャンペーン特典として1年分の友の会会員権をプレゼント♪この機会にご入会いただくと2,300円もお得です!

チケット取扱い

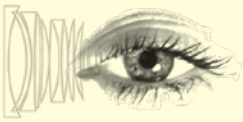
- 名古屋市文化振興事業団チケットガイド　TEL：052-249-9387（平日9：00～17：00／郵送可）
  そのほか事業団が管理する文化施設窓口（土日祝日も営業）でもお求めいただけます。
- チケットぴあ Pコード：328-648　TEL：0570-02-9999 ※サークルK・サンクス、セブン-イレブン、中日新聞販売店でも直接お求めいただけます。
  ※一般のみの取り扱いです。

頼もしい味方をお探しですか？

集客・販促プランナー　アートディレクター　印刷コンサルタント

駒田印刷株式会社　TEL(052)331-8881
〒460-0021　名古屋市中区平和2-9-12　http://www.kp-c.co.jp

舞台映像専科
ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ハイビジョンで撮影し
ブルーレイディスクでお渡しします。



ビデオソフトの企画制作
有限会社 エーワン・ビデオ・システム
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル
◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命下さい
MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ
〒464-0850 愛知県名古屋市千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
TEL(052)735-3151　FAX(052)735-3152　E-mail：mpoffice@pa2.so-net.ne.jp
業務内容　①舞台の企画・制作マネージメント　②イベントの企画制作
③芸術団体のコンサルティング　④舞台・イベントの運営

デザイン・印刷／駒田印刷株式会社

なごや文化情報は、古紙パルプを含む再生紙を使用しています。

平成29年4月25日発行（隔月1回25日発行）通巻374号　編集発行／公益財団法人 名古屋市文化振興事業団　〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号　TEL(052)249-9385　FAX(052)249-9386　HP http://www.bunka758.or.jp/